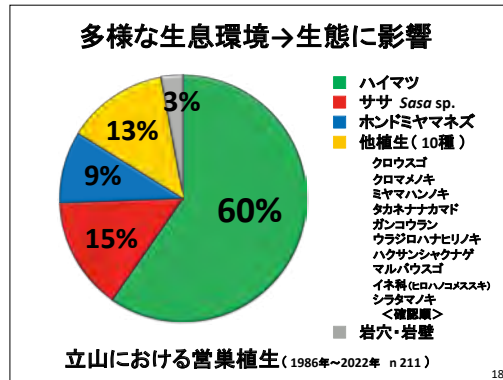




多様な生息環境が生態に影響しているのが、立山の最も特徴的なのは、ハイマツが僅か60%しか使われていなくて、あと40%ほかのもので、これはたまたま私たちが見つけた211例の割合ですから本当の割合とは言えませんが、少なくともこの80の縄張は縄張内にハイマツがあってもこういう植生を選択しておりました。これが立山の最も特徴的なことで、多様な生息環境が生態に影響しているほかのいろいろなデータがありますが、これだけ御紹介します。



見ていただくと、一様に見える立山ですが、このように生息環境としてそれぞれの縄張環境が結構違うということです。

ちょっともう時間が最後ですが、今年、立山で非常に話題になった写真を紹介します。

これが雌親で……。



若鳥期46日ぐらいと49日ぐらいが12個体固まっています。こんなのはめったに見られなくて、特に今年はこれが遊歩道の近くでずっと12個体を連れていました。これはカモとかで有名なひな交ぜと言って、ほかの家族とすれ違ったときに間違っって別の家族についていってしまう、最初に5羽連れていた親がすれ違って、ほかの家族の子が3羽入って8羽なったところに、またほかの家族とすれ違って12羽になったという非常にめずらしい情景だったので皆さんに御紹介しました。

これで終わります。

ちょっと時間をオーバーしてしまいました。早口で申し訳ありませんでした。

ありがとうございます。(拍手)

○有山 義昭 松田様、ありがとうございました。

立山で長年にわたりまして、50年間ということで、私も生まれてない頃から継続して調査をされているということで、大変興味深くお聞きしました。

ちょっと質疑の時間は最後にさせていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

2「最南限繁殖地のニホンライチョウ

Lagopus muta japonica なわばり雄の季節移動」

朝倉 俊治 (静岡ライチョウ研究会)

堀田 昌伸 (長野県環境保全研究所)

近藤多美子 (静岡ライチョウ研究会)

○座長(有山 義昭) それでは、続きまして「最南限繁殖地のニホンライチョウ Lagopus muta japonica なわばり雄の季節移動」ということで静岡ライチョウ研究会の朝倉様と近藤様、長野県環境保全研究所の堀田様に御講演いただきます。

私もちょうど平成17年に静岡県の沼津にいたときに1週間かけて光岳のほうから TENT を担いで塩見のほうまで縦走した記憶がありますが、その頃にライチョウ親子を観察しながら登山したという記憶にございます。

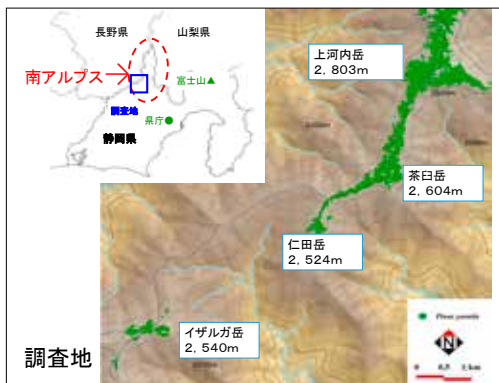
では、朝倉様、どうぞよろしくお願いいたします。

○朝倉 俊治 静岡ライチョウ研究会の朝倉です。よろしくお願いいたします。

最南限繁殖地のニホンライチョウ Lagopus muta japonica なわばり雄の季節移動



「最南限繁殖地のニホンライチョウ LAGOPUS MUTA JAPONICA なわばり雄の季節移動」ということで説明させていただきます。



私たちがやっているのは南アルプスの南部のところでありまして、上高地岳2,803メートルからイザルガ岳2,540メートルまでのおよそ7キロちょっとの範囲の調査をしています。

上高地岳の北4キロのところには、聖岳3,013メートル、日本百名山の1つである聖岳があります。また、イザルガ岳の西南西1キロぐらいのところには、光岳という、これもまた百名山ですけれども、2,591メートルの山があります。その間のところを調査しています。

緑色に塗ったところがハイマツの分布するところです。

先ほども言いました光岳というのはハイマツの日本の南限の山岳ということで、ハイマツはこの辺が日本で見られる最後の分布の場所、南限のところというふうなことになります。

このような南限の場所で縄張がどのくらいあるかというのを示したものであります。

先ほどの立山のはすごくびっしり丸がありましたけれども、南限のところは山の尾根筋に少しずつあるというふうな形になっていまして、左側が2007年、右側が2014年の縄張りを示したものです。

2007年には、上高地岳で9、茶臼岳で4、イザルガ岳で1です。

2014年には、上高地岳で6、茶臼岳で3、仁田岳で1というふうに北から南に下がるにしたがって縄張の数は減ってきています。尾根がだんだんと細くなるというふうな感じのこともあります。

イザルガ岳で1997年から調査を始めているわけですが、縄張をつくる雄は年によって数が違うということで、同じのがいるか、それとも毎年違う個体が来ているのかを調べたくて、2007年から中村先生に御教授いただきまして捕獲して個体識別をするようになりました。そうしますと、縄張を持った雄は、また違う年にもここで縄張を持つというふうなことで、ある程度縄張を持ったものはまた同じ場所での生活を繰り返すというふうなことが分かってきました。



これは主な山岳の場所の縄張の数を示したものです。

赤いのが茶臼岳でして、一番多いときは4、少ないときは1ということで、1～4縄張が茶臼岳でできました。

その次の仁田岳、ちょっと下がった仁田岳のところに行きますと一この緑色が仁田岳です。1縄張ができたりできなかったりというふうになります。

そして、イザルガ岳では2縄張から1縄張ができたりできなかったりというふうなことで、そんなに大きな変動は、1997年から今日まで変わっていないと思われます。

今年は茶臼岳と仁田岳で縄張が確認されまして、茶臼岳についてはひなを2羽連れた母子群が確認できました。ですから、日本の南限で繁殖しているのは、今年は茶臼岳というふうなことになります。

調査は大体5月から11月まで、できれば毎月1回調査視に入るということで、無雪期—雪がない時期に入っています。

茶臼岳に行くことが一番多いのですが、5月から9月までが繁殖期、10月から3月までが非繁殖期というふうに区分しまして、ここの縄張の数を数えるのと、あとはひなが産まれたかどうかを確認するのと、秋のときに群れになるというところの確認をするようにしています。

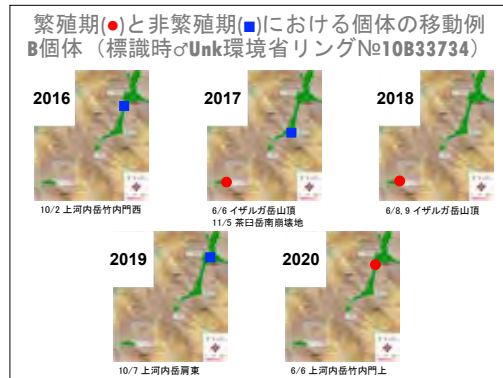
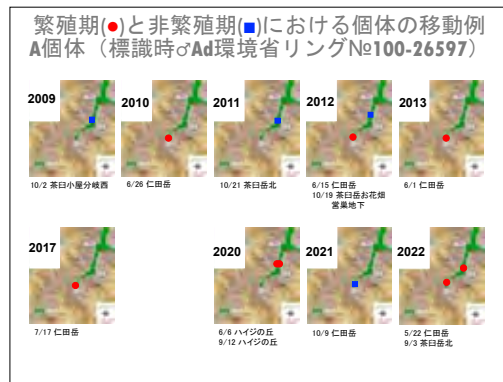
茶臼岳で縄張を持ったり子供を育てたりするライチョウは一年中茶臼岳ににいるというふうなことが分かってきてまして、定着しているということが言えます。

最南限のイザルガ岳、あるいはその1つ北の仁田岳では、秋群れの時期に北へ移動するという個体が幾つか確認されています。

ライチョウの生活史ステージ

小林篤・中村浩志 (2018)より

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
越冬期			なわばり確立・つがい形成期		抱卵期	育雛期			秋群れ期		越冬期
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
非繁殖期			繁殖期			非繁殖期			非繁殖期		



秋群れ(10月から11月)の状況 (2007~2021)

- ・確認秋群れ数 56群
- ・一群平均個体数 2.8個体
- ・群構成 成鳥混群 16群
成鳥♀群 10群
♀群 7群など

山岳別一群れ個体数					
山岳別秋群数					
一群 個体 数	イ ザ ル ガ 岳	仁 田 岳	茶 臼 岳	上 河 内 岳	個 体 数 計
8			1	1	8
7				0	0
6			1	1	2
5			2	2	4
4			8	2	10
3			6	1	7
2	1	1	13	6	21
1	2	4	5	11	11
群数計	1	3	34	18	56
					154

その移動する2個体を紹介させていただきます。

A個体、2009年に茶臼岳で捕獲しまして、今年も仁田岳、茶臼岳で再確認されています。14歳以上の個体と思われます。12回再確認しまして、そのうち5回は仁田岳で縄張を持ちました。そして、秋には1.5キロ北の茶臼岳で秋群れになっています。

これはB個体、2016年に上高地岳で捕獲して標識をし、今のところ2020年が最後の確認ですけれども、今までに7回再確認されていて、イザルガ岳で2017年と2018年の2年連続で縄張を持ちました。秋群れのときは茶臼岳あるいは上高地岳で確認されることが何回かありまして、イザルガ岳から上高地岳までだと7キロちょっと、秋には移動するというふうなことが分かりました。

秋ですけれども、10月から11月に去年までで—今年は今月後半に行くわけですけれども—確認された秋群れは56群、全部で確認しました。1群の平均個体数は2.8羽でした。最も多い秋群れの数には8個体、一番多いのは2個体の場合が21群確認しました。

イザルガ岳から上高地岳の中で、茶臼岳が全部で34群確認しています。

秋の群れのときには、定着個体は定着個体同士で構成をしている場合と、そこに移動個体が入ってきたりとかということで、秋に南限のライチョウは交流といいますかをしているというふうに考えています。

秋群れ(10月から11月)の状況 (2007~2021)

- ・確認秋群れ数 56群
- ・一群平均個体数 2.8個体
- ・群構成 成鳥混群 16群
成鳥♀群 10群
♀群 7群など

山岳別一群れ個体数					
山岳別秋群数					
一群 個体 数	イ ザ ル ガ 岳	仁 田 岳	茶 臼 岳	上 河 内 岳	個 体 数 計
8			1	1	8
7				0	0
6			1	1	2
5			2	2	4
4			8	2	10
3			6	1	7
2	1	1	13	6	21
1	2	4	5	11	11
群数計	1	3	34	18	56
					154

それを一覧表にした主なものがこの表なのですが、左側に9個体の標識した主な個体が入れてありまして、上側が移動個体、下側が定着個体です。

例えば、ここに「4」と書いてあるところはE、F、G、Hというのが1つの群れの中でした。それが2010年10月です。

その前の年の2009年10月のときはFとGと一緒に秋群れの中にいて、この9個体以外の4個体と一緒になっていて、6個体の群れになっていました。

先ほど紹介しました移動個体のAですが、このAは2009年10月にこのE個体と一緒に秋群れにいて、合計3個体、この2個体以外にもう1個体いたということです。

それから、2012年の秋、10月19日に同じくこのE個体と一緒に、2羽の群れでいたというふうなことになります。

重なって何回か一緒に出会っているというやつを抜き出すと、ここになりまして、移動個体のAは、定着個体のEと複数年、秋群れの中で構成されていました。

それから、移動個体のCは、H個体、これですね、これと一緒に—こことこ—ということになるのですけれども—いました。

このように交流があって、個体同士で一応面識があるというふうなことが分かります。

茶臼岳における秋群れ構成 (2008~2017)

個体	なわばり	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	複数年交流した個体
A	移動	仁田	3		4	2						E
B	移動	イザル									4	-
C	移動	仁田			4			4				H
D	移動	イザル			3							-
E	定着	茶臼岳南	4	3		2		4	5			A,F,G,H
F	定着	茶臼岳北				3			4			E,G,H,I
G	定着	茶臼岳北		6	4					3	2	E,F,I
H	定着	お花畑				4	1	3				C,F
I	定着	ハイツの丘					2	2	5	4	3	F,G

縦横は群れ構成個体、数字は一群れ個体数を示す(未標識個体を含む)。

茶臼岳北斜面に移動した成鳥雄の事例



まとめ

- ・南限分布地のニホンライチョウは繁殖期と非繁殖期(秋群れ期)に同じ山岳で生活する定着個体と異なる山岳で生活する移動個体がい
- ・最南限繁殖地のなわばり雄には秋群れ期に北へ移動し、定着個体と生活を共にする個体が複数みられた
- ・これらのなわばり雄の季節移動は最南限繁殖地のみにみられるのか、あるいは地域個体群の分布域末端に普通にみられるのか興味深い

具体的に同じ年で縄張を持った日にちと、それから秋に縄張を持った日にちを示したものがこの図でして、A個体の場合は2012年6月15日に仁田岳で確認されました。縄張を持っていました。その年の10月19日に茶臼岳で確認されました。A個体の移動距離は、2012年の場合は2.2キロです。

そしてB個体—この写真の個体ですけれども—2017年6月6日にイザルガ岳で縄張を持っていたのを確認されていて、その年の11月5日に茶臼岳で再確認されています。この移動距離は5キロというふうなことになります。

まとめますと、南限分布地のニホンライチョウは、繁殖期と非繁殖期、秋群れ期に同じ山岳で生活する定着個体と異なる山岳で生活する移動個体がい

ました。最南限繁殖地の縄張雄には、秋群れ期に北へ移動し、定着個体と生活を共にする個体が複数見られました。

これらの縄張雄の季節移動は最南限繁殖地のみにみられるのか、あるいは地域個体群の分布域末端に普通にみられるのか、非常に興味深いということで、ほかの山岳での末端地域での秋群れと繁殖期の状況というのが知りたいなあというふうに思っているところです。

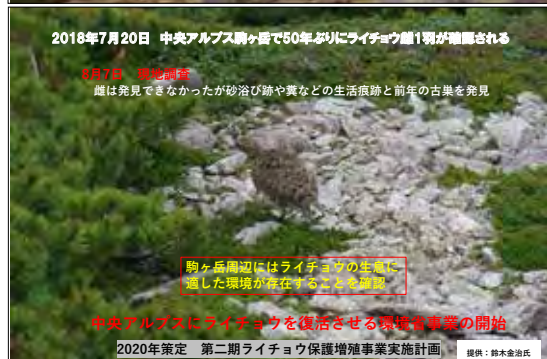
発表は以上です。

○座長(有山 義昭) 朝倉様、ありがとうございました。(拍手)

日本最南限の繁殖地のイザルガ岳周辺の状況、あとは非繁殖期、繁殖期の移動経路についてお話いただきました。

3「2020年乗鞍岳から中央アルプス駒ヶ岳に空輸した3家族計19羽の その後の生存状況と繁殖地への分散と定着」

中村 浩志(一般財団法人中村浩志国際鳥類研究所)



○座長(有山 義昭) それでは、続きまして「2020年乗鞍岳から中央アルプス駒ヶ岳に空輸した3家族計19羽のその後の生存状況と繁殖地への分散と定着」といたしまして中村先生のほうからお話いただきます。

中村先生、どうぞよろしくお願いいたします。

○中村 浩志 私からの発表は中央アルプスにおけるライチョウの復活状況の話です。

昨日、シンポジウムで小林君が発表した内容と重複いたします。

昨日の話にもありましたが、2018年に50年ぶりに中央アルプスにライチョウが発見されて、そしてそのライチョウの様子を8月7日に調査に来ました。その調査では雌は発見できなかったのですが、生活痕跡とか前年の古巣を発見することができました。

私はこのとき初めて中央アルプスに登りました。中央アルプスでは私の学生の頃にライチョウは絶滅していましたから、中央アルプスに登る必要がなかったわけです。それが、初めて登って駒ヶ岳周辺には非常に良好なライチョウの生息環境が残っていることを知りました。

そのことで翌年から環境省による中央アルプスライチョウ復活事業が開始されました。